

九十歳記念  
**永井潔展**

戦前戦後の油彩水彩素描70点



自己プロフィール 30.0x19.8cm

セシオン杉並

2006年 9/28(木) 休み  
9月26日(火) ~ 10月3日(火)  
10:00 ~ 18:00 (初日 14:00から、最終日 16:00まで)

主催/永井潔展実行委員会

後援/日本美術会



注湯 110.7x90.9



トラクターのある納屋 67.5x58.5

## 「永井潔個展に寄せて」

北野 輝

「永井潔」とは何者か。氏の仕事の多面性は、私たちにそんな疑問すら呼び起こす。たしかに彼は、戦後の民主的美術運動の実践と創作、理論の各面をリードし続けてきた存在であることに間違いない。だが彼には、例えば芸術論を中心とする十冊をこえる著書があるだけでなく、その中には反映論に関する、専門の研究者たちに先駆けた著書(『反映と創造』)すらあるのだ。しかし、氏は自らを著述家やその他としてでなく、あくまでも画家として自認、同定しておられる由。だから、その氏の画業全体をたどる個展がこれまで開かれてこなかったのは、不思議でもありまた残念なことでもあった。

卒寿を記念する今回の個展には、幸にして作者所有の作品の中から戦前戦後の画業全体に及ぶ約70点が展示されるという。氏はかつて画集の後書きに、「鍛造」や「合唱」などの作品が失われてしまったことの無念さを洩らしておら

れた。それらが自信作であるばかりでなく、本格的に構想・構成されたタブロー画の位置づけを持つからだろう。今回の個展にそれらが展示される由もないが、それらに並ぶ「注湯」や「燃える心臓」などを観ることができるのは幸いである。また氏には多数の人物画、肖像画があるが、そのなかには対象人物の顕彰や記念のためのいわば「機会画」(機会詩Gelegenheitsgedichtをもじっていえば)や習作の域を超えた、リアルな人間像の探求と成果があるのも見逃せない。人物画といえば、木炭素描の「母」(1950)はとりわけ忘れがたい。それは、1940年代末から50年代にかけて、戦後リアリズム美術の優作が相次いで生み出されていった時期の所産として、同じ小品の佐藤忠良「群馬の人」(彫刻、1952)などと肩を並べるものであろう。付言すると、卓抜な描写力を生かした挿絵は、マイナーなジャンルの仕事として軽視されることなく、高く評価されて然るべきだろう。...いずれにしても、氏の画業の本格的な理解と評価は、遅まきながらこの個展をもって始まる、いや



手紙の煙 91.0x72.8



画室 100.0x80.3

始めなければならない、といっても過言ではあるまい。それは単に「永井潔」という一画家の仕事を問うだけにとどまらず、民主的美術運動とその創造の在り処と方向と成果を問うことに重なるだろうし、リアリズム美術のあり方や氏のリアリズム論を実作との関係をもふまえて再検討すべき起点ともなるだろう。

### 「振り出しに戻る」

永井 潔

レオナルド・ダ・ヴィンチ曰く「理論が作品に先立つことこそ最大の禍なれ」と。わが師裕伊之助も「理屈で描くな、感覚で描け」といった。その通りだと共感しながらも、私は理屈にこだわらずにはいられなかった。野口弥太郎さんが私を批評した。「彼はあれもいけないこれもいけないと全部否定し手許になにも残らなくなった」と。耳が痛い、理屈にこだわって作品の成長を台なしにした人も、一人位はいてもよからう、とも思う。それはその愚かな個人の禍であっても、必ずしも社会の禍ではない。

思えば、色価と実存、この二つの謎のせいで私は理屈っぽくなった。色価は音程のようなもの、これが狂っては絵にならない。又、目の前にいるのは一人一人かけがえのない実存であり、人間一般ではない。この謎にこだわることは、写生の初歩的課題の前で足踏みをつづけるようなものだ。かけがえのない実存に似せることを第一義にすれば、すべては肖像に傾く。世界の新傾向に素早く反応するような方向には、私の興味は遂に拡がらなかった。のろまな一生とは、思うが、振り返って全然無駄な人生だったとは、思はない。

近頃日や耳が衰え、事物の細部がぼやけてわからなくなるにつれて、世界の全体像が却ってくっきり浮かび上がるような気がする。老人力とはこのことか。或いはこれからが本番なのかもしれない。昔は60歳が還暦だったが、おくての私は90歳で漸く振り出しに戻った。そのけじめの回顧展を実行委員の方々のお世話で開くことができ嬉しい。

永井潔略年譜

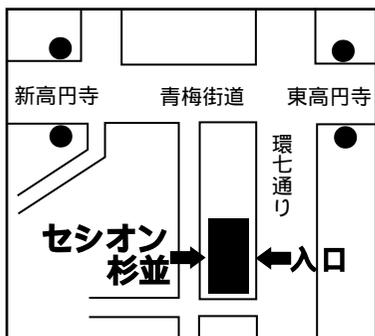
- 1916年 群馬県前橋市に生まれる。
- 1935年 旧制一高中退、碓伊之助先生に師事、二科技塾研究所に通い絵を学びはじめる。同じ頃、太田克巳、霜多正次、梅崎春生らと同人誌『寄港地』を出し表紙担当、エッセーも書く。西口克巳と親交。
- 1936年12月 現役兵として朝鮮羅南歩兵76連隊に入営。翌年日中戦争開始により除隊延期。
- 1938年7月 張鼓峯事件に動員され胸部盲銃創を受け、約9ヶ月入院。
- 1939年4月 除隊帰京。本郷美術研究所に通う。社会科学の勉強をはじめ。9月、一水会に『自画像』出品入選。
- 1940年7月 治安維持法違反容疑で検挙され、10月仮釈放後警視庁に通って取調べ継続。
- 1941年7月 召集令状が来て、処分保留のまま朝鮮成興歩兵74連隊に入営。
- 1942年12月 召集解除帰京。
- 1943年2月 文化学院美術部助手として就職。(美術部長碓伊之助、教授脇田和、山口薫、村井正誠等)7月退職、間もなく文化学院閉校、参謀本部別室として接收される。
- 1944年2月 美術出版社に就職、今泉篤男氏編集季刊誌『制作』を手伝う。6月召集令状、千島エトロフ島に駐屯。
- 1945年 札幌北部軍管区司令部報道部に転属。終戦、10月頃復員帰宅。11月頃川尻泰司、林文雄、沼田秀郷らと民主主義美術研究会をつくり、戦後美術運動の方法を模索。
- 1946年4月 日本美術会創立に参加、委員となる。7月一水会役員となる。
- 1947年 第一回日本アンデパンダン展に出品の『蔵原惟人像』読売新聞年度ベストスリーに選ばれる。
- 1948年 美術雑誌『創美』にエッセイ「論理の救出」「美術革命の課題」等を発表。7月碓伊之助日本美術会委員長就任と同時に事務局長になり2年務める。
- 1953年 第15回一水会展出品の『母』一水会優賞及びさくら新人賞を受ける。
- 1956年2月 日本美術会事務局長に再選され一年間務める。
- 1960年 雑誌『リアリズム』に小説「春画」を発表、以後時々小説を発表するようになる。この頃グループ展「草炎」に参加。
- 1963年12月 東独ベルリンの「日本版画展」に日本美術会代表として参加。



自画像60.6x45.5cm

- 1966年 日本美術会附属研究所創設に当り初代研究所所長に就任、4年間務める。
- 1983年 日本美術会代表に就任、以後6年間務める。学校法人中央労働学園理事長に就任、東京文科アカデミー校長となる。
- 1986年11月 キューバを訪問、日本美術会代表としてUNIACと美術交流協定を結ぶ。
- 1987年 武蔵野外語専門学校校長に就任。
- 1991年12月 武蔵野外語の短期留学に随行、ロンドンに滞在。
- 2004年3月 武蔵野外語専門学校校長退職。現在、日本美術会々員、日本民主主義文学会々員。

- 主な著書「芸術論ノート」新日本出版社、1970年  
 「人間と芸術と」新興出版社、1972年  
 「芸術の伝統と創造」国民文庫、1974年  
 「芸術と自由」新日本出版社、1978年  
 「反映と創造 - 芸術論への序章」同上、1981年  
 「永井潔画集」同上、1994年  
 「私の大学」本の泉社、2001年  
 「ごまめの呟き」光陽出版社、2004年  
 「美と芸術の理論」同上、2004年  
 「あぶな系」本の泉社、2004年  
 その他



**セシオン杉並 〒166-0011杉並区梅里1-22-32**  
**03-3317-6611**

**交通** 地下鉄丸の内線東高円寺駅5分、新高円寺駅7分  
 関東バス杉並車庫前5分、都営バス・京王バスセシオン杉並前2分

**永井潔展実行委員会**  
 〒168-0073東京都杉並区下高井戸5-16-9  
 TEL03-3303-8622 星島方